

## Ⅳ. 現代のスポーツ動向

### — 時事問題検討会のまとめ —

#### 1. 第1グループ (87.4.28)

##### (1) 有明コロシアムの完成と“みんなのスポーツ”

川口 智久

★ 1987年4月4日、一面のテニスコートを一万の観客席が囲む“国際級”の施設が東京湾の埋め立て地に完成した。これは有明テニスの森公園に東京都が日本テニス協会の陳情を受け、総工費約50億9千万円を投じ単年度でつくり上げたものである。

『スポーツのひろば』1987年6月号には2葉の写真とともに「まぶしいね有明コロシアム」と題して次のように紹介されている。少々長いが全文を引用しておこう。「日本に国際級の有明コロシアムが完成した。高さ20mの八角形の外壁がそびえ立つ。一面のテニスコートを一万の観客席が囲む。観客席は緑、青、赤の三色に別れている。センターコートは落ち着いた雰囲気のもスグリーン。初夏の日差しを受けたコロシアムは、ピカピカに光っている。日本テニス協会は、このコートで国際級大会を開催し、日本のテニス界に活気をもたせるのがねらい。ピカピカに光るコロシアムの輝やきに負けにくい国際級にピカピカの日本選手が現われる日も近いだろう」。これ以外にここではこのコートの持つ社会的意味や大衆スポーツへの影響などについては全く言及されなかった。

★ 有明テニスの森公園には現在、既存のコート48面がありテニスの愛好者たちによって利用されている。ここに全天候型のハードコート一面と3階建ての観覧席を持つ総面積8700㎡のコロシアムが完成した。この建設に当って東京都港湾局は85年予算として7億8千万円を計上し86年度とあわ

せ、当初の全体計画額は15億8800万円を見込んでいた。しかし85年10月に財務局に提出された港湾局来年度予算見積もりでは48億3千万円を計上。85年度予算とあわせ56億1千万円にのぼる大事業となる見通しになった(『赤旗』85年11月1日)。

このように50億円余を費す大事業にもかかわらず、利用対象となる大会はいまのところ年間わずか9回。一万人規模のテニス大会となると年々、3回というのが現状(『赤旗』同上)と報道されている。

★ このセンターコートの建設について、新体連を含む「連絡会」に対して港湾局の説明会は1985年10月1日に開かれている(85年9月2日付で港湾支部の『日刊潮流』№5392が発行されかなり具体的な内容と問題を指摘している)。会終了後、「今後のとりくみ」として、この計画はまだ公表されていない——議員も知らない。12月議会で出る。10月中に財務局へ予算案が出されれば公表できる。その後にとりくみ方を打合わせましょう、と結んでいる。

★ 今日大衆スポーツはますます盛んになりつつある。それは社会的諸環境・情況がスポーツ要求を惹き出す役割を果たしているからである。しかしながら大衆のスポーツ要求は貧困なスポーツ施設状況によって十分に満たされていないのである。他方都内には大企業の参入による超豪華なアスレチック・クラブが続々と誕生し、多様な要求を満たしてくれる。しかしこれらの機関は多額な経費を必要とするし、庶民の要求を満たしてくれるものとは言えない。

このような意味で有明テニスの森公園におけるセンターコートの建設は決して看過できるものではない。たしかに超一流プレーヤーの演技が大衆

の意欲を喚起し、スポーツへの導入の役割りを果す側面も決して全面的に否定するものではない。しかし現在一刻も止まることを許されない緊急課題は大衆が主体的にいつでもどこでもスポーツを实践できる条件をつくることに他ならない。しかしながらこれらの要求に対して異句同音の行政側の答えは財源の不足というものであった。日本テニス協会の要求であり、世界的なイベント開催が可能であり、都の目玉施設として位置づけたいというものであっても、これは主客を転倒した発想であり、都民の願いを真に解決しようとする意思のないものと受けとらざるを得ない。